

A photograph of a red flag on a bamboo pole in a landscape with a river and mountains. The flag is bright red and is flying on a tall, thin bamboo pole. The background shows a wide river in the foreground, a line of green trees and bushes in the middle ground, and a large, dark green mountain in the background under a blue sky with scattered white clouds.

ARTIST IN RESIDENCE
IN NOBEOKA
2013

2013.10.11-27
ARTIST IN RESIDENCE
IN NOBEOKA

目次

目次	1
『地域力』を見直す	2
『風土と制作』	4
木名瀬 薫	6
石井夏実	10
丸山喬平	14
石川洋樹	18
石倉未那美	20
稲葉星舟	24
ワークショップ	28
作家略歴	30
『潜在能力』	31
謝辞	32

『地域力』を見直す

2002年にスタートした「水辺から文化の里づくり」事業に、アーティスト・イン・レジデンスを取り入れてちょうど10年目となった。今年は東京芸大の院生5名と金沢美大の4年生1名、計6名という大人数で宿泊場所に地域内の借家を一ヶ月だけ借り上げ、6名で共同生活をしてもらったのも初めてである。

芸大の学生達は、林武史先生の引率で、9月に下見を行い、地域をある程度理解した上で、10月26、27日の「東海さるく」という地域資源も活用したスタンプラリーで作品を発表すべく、順次延岡にやって来た。同時に台風も立て続けに襲来し、飛行機のダイヤにも翻弄される事となった。

この地で、アーティスト・イン・レジデンスがスタートしたのは、12年前のワークショップがきっかけである。「リバーパル五ヶ瀬川」の管理運営の委託を受けて、毎日通う内に、この地域には「人が集まって住む」ための迷路のような昔の町型が残ることに気付いた。舟運基地だった名残も多い。これを活かさないかと開催したワークショップでの3つの提案の内の一つが東京画廊の山本豊津氏が中心にまとめたアートを取り入れた町づくりマップ。1年の準備のもと、山本豊津氏の紹介で美術家の吉田暁子さんが訪れ、加藤さんの借家を借りて「延岡の似話」という作品を作ってくれた。

その折、吉田さんがこの地域を気に入り「土井さん、私、来年は文化庁の派遣事業で1年間ニューヨークに行くので、そこで各国政府の奨学金を受けている人が所属するスタジオから、誰か探して送り込んであげようか」という話になり、翌年からメキシコ人ウンベルト・デュカ、キューバ人リセット・カスティリヨ、中国人幡星磊（パン・シンレイ）、香港の蛙王（フログ・キング）、台湾系アメリカ人フォン・シーチェ、シンガポール系アメリカ人ミシェル・コンと続いて来た。

その間、カンザス大学で5年間アートを学んだ苅安まみ子さんが、通訳とアーティストの支援をしてくれていたが、札幌に行ったので、一昨年は大平龍一君、昨年は吉田暁子さんが教え始めた金沢美大の院生、神谷麻美さんと日本人になっていた。

今年の6名は、男女3名ずつ。男性は主に室内での作品、女性は果敢に自然に挑み、アースワークのような作品を作ろうとして奮闘したが、立て続けの台風にも翻弄され、強風や豪雨、川の増水、野外でのスケール感など、自然に立ち向かう作品を作ることの厳しい洗礼も受けた。

また、アイデアを実際の作品にするための手順や技術については、地元の方から沢山の応援を受けた。具体的には、公民館の壁に下地を作る作業をしてもらった大

工さん。写真をシートに印刷してくれた看板屋さん。田圃での作品のために田圃の提供を交渉してくれた人。田圃に印刷したシートを張るために鋼管の手配や建方のアイデアと実際の作業も手伝ってくれた方達。公民館に集まってQRコードの作品のためのスチレンボードを3センチ角にひたすら切り続けてくれた方達。作品に誘導するための旗やスクリーンのため、ミシンを持参して縫ってくれた人。そしてビデオ作品のため出演交渉をしてくれた人や、その作品の上映のため、プロ仕様の100インチと120インチの裏から写すスクリーンや、やはりプロ仕様のDVDプレーヤーを持参して、リハーサルから参加して機材のプロとして粘り強く的確なアドバイスをして頂いた人など数え上げたらきりが無い。

アイデアを具体化するには様々な知恵や技術が必要だ。それは生活の中から体得される物が多い。学生がこつこつとスチレンボードを切っている横で、独自の定規を作って、3倍の早さで切っている地元の人達を見たり、強風でバサバサにちぎれた写真のシートを、ビニールハウス修理用のテープを持参して修理してくれている光景を見ると、今回の学生の作品は、地域の応援無くして出来上がらなかったと痛感している。

今、改めて「地域力」という言葉をかみしめ、「地域力」を誇らしく思っている。

古来日本では、農業や地域を維持する土木工事などは地域の人が力を合わせて取り組む風土があったし、自分の手を使って暮らしを紡ぎだす事にも長けていた。その中で、地域のコミュニケーションも育まれて来たのである。

今、そういう場が少なくなっている中で、学生にそんな場を提供してもらい、地域の中の新しいコミュニケーションの手法を気付かせてもらったような気もしている。

NPO 法人 五ヶ瀬川流域ネットワーク
リバーパル館長
土井裕子

『風土と制作』

私がリバーパル五ヶ瀬のアーティスト・イン・レジデンスに係わって十年の歳月が経ちました。

数多くのアーティストに参加していただきましたが、このたび初めて美術大学とのコラボレーションを実現することが出来ました。東京藝術大学彫刻科の林武史研究室の修士生と金沢美術工芸大学美術科吉田暁子研究室の学部生の計六名です。六名は東海東地区の五ヶ所に作品を設置しました。都市空間と異なる空間で悪戦苦闘していますが、見応えのある作品が住民や訪れる人々に好感を抱かせました。次にそれぞれの作品に関して私の雑感を記します。

石井夏実君の作品「つつむ」

素材をその自然性を生かして使う場合は、作品が設置される環境との関係を慎重に考えて下さい。「つつむ」は細い竹を組んで制作され、都市の人工的な環境ではその繊細さが生かされませんが、自然性の情報が多いこの場所では表現力が弱くなってしまいます。作品は観る人の想像力を超えていなければなりません。人の営みは自然の前で非力であることを強調するために、細くて弱い素材の特徴をさらに弱く表現しても良かったと思います。

石倉未那美君の作品「帰路」

展示の当日は強風のため計画どおり実現できず残念でした。誰が帰路に着くのか？そして観る人がこの作品で「自分の帰る所」を思い出す契機となるのか？個人の「思い」を喚起させるためには、作品の設置場所とサイズを考える余地がまだあると思います。写真をアートの素材とする場合、撮られたイメージを超える表現としなければなりません。絵画との違いなど写真の芸術としての意味を考えて作品に生かして下さい。

木名瀬薫君の作品「葦原を通る」

視覚的情報であった美術に、身体そのものを参加させる作品は環境を巻き込む表現には適しています。空間には身体と係わる歴史的意味があります。たとえば神が降りる場所を指定する結果や、茶道や華道のように身体の所作が行なわれる場所などです。そして子供の頃に自分の空間を秘して作った快感など心と空間の関係など制作にあたって考えなければならないことは山ほどあります。

稲葉星舟君の作品「accessgate」

アートは仮想空間そのものです。アーティストは自身がつくる仮想空間へ観る人の心を誘うテクニックを持たなければなりません。現代の情報化社会では、現実と仮想の境が曖昧になり世界全体がディズニーランド化しています。生活が演劇的に

なり都市を舞台として演じているような錯覚に落ちて自分を失いがちになります。QRコードは社会に存在する全ての物を記号化し商品の海にぶちこむシステムとして創られました。便利とは何か！スマートフォンを使う自分とは何か？そういう批評的なコンセプトを表現に含ませなければ作品を見せるファイルでしかありません。

丸山喬平君の作品「あこがれの記憶」

テレビが普及される以前は日本国中のいたるところに恋島のような映画の劇場がありました。フィクションである映画は村人に日常の生活を一時忘れさせ、外の世界を知る窓の役割を果たしていました。テレビの普及により恋島のシアターは映画とともにコミュニケーションの場所でなくなります。丸山君の作品は村の人たちに昔の恋島シアターを思い出させるにはポスターの数が足りなかった。アートは異物として存在するのが本義で、過剰でなければ異物にならず、コミュニケーションを喚起させません。着眼点は良いので、表現にまでもう少し深く考えてほしかった。

石川洋樹君の作品「恋の島」

恋島の地名に関心を持ったことが勝因だと思います。どの土地にも必らず暮しの由縁があり、時間を遡ることで人の存在理由を解き明かすのもアートの重要な一面です。なぜ画家は富士を描くのか？ただ美しいだけではない、何世代もの人々が見続けてきたからです。またアーティストは折口信夫が言う「まれびと」の役割を担っています。まれびとの石川君だからこそ人々は語ったのです。その語りを映像として映画館で上映して作品としました。人々の心のなかに外があり、皆が憧れた外はもう現代社会にはありません。もう一つ重要なのは椅子に座らせたことです。椅子は畳と違い個を確定させる道具なので、個人主義の原点が椅子とすると民主主義の原点が皆が共通に使う大きなテーブルになるのかななどと考えたりします。椅子の扱いにもう少し注意を向けてもらえばパーフェクトでした。

石川洋樹 + 丸山喬平の共作「シアター恋島」

人は集まって人になります。現代社会の抱える幼児性は集まることを忘れたからです。人は様々な人と会って強くなり自分をつくります。便利な社会は集まりを疎外し人々を孤立させました。二人の作品はコンセプトとテーマが場所に一致して秀逸な作品となりました。

それぞれに的が外れているかもしれませんが、ご容赦お願いします。

東京画廊代表
山本 豊津